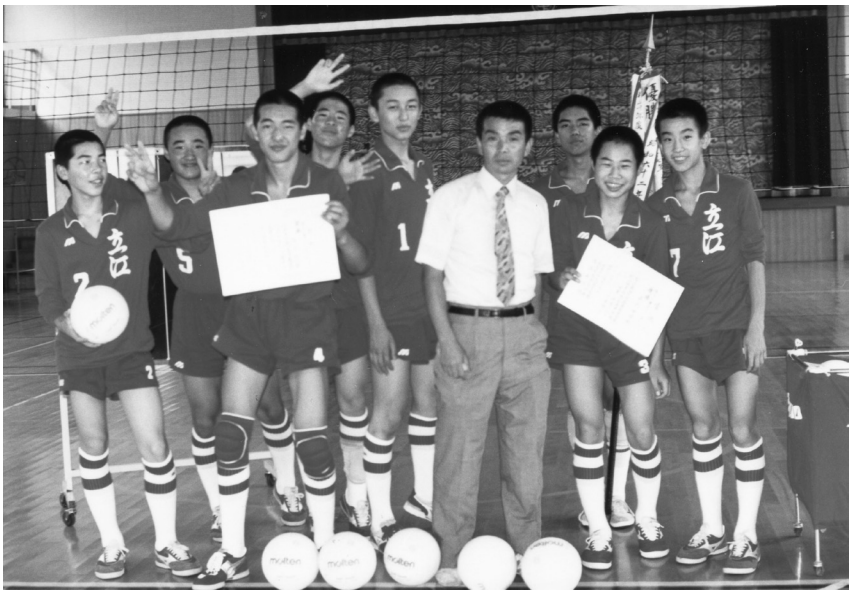
私と立江中学校

第17代校長　井上　文夫

山々の木々の緑が校舎の窓から目にしみる。風にそよぐ稲が田んぼ一面に広がっている。虫の声、蝉の声、そして小鳥のさえずりが、心をいやしてくれる。立江中学校は自然にあふれていた。そんな恵まれた環境の中で育まれた生徒達の心は、伸びやかで純粋であたたかい。そして何よりも地域の方々の人情あふれる協力や支えが立江中学を育ててくれた。

戦後間もない頃建てられた立江中学校が、69年の長い歴史の幕を今閉じようとしていることに、大きな寂しさを感じているのは私一人ではないはずです。

私の長い教師生活の中で、約半分の17年間を過ごしたのが立江中学校でした。一教員、教頭、校長と立場は変わっていきましたが、その間の思い出が、今頭によみがえってきます。生徒達が何事にも喜びをもって取り組むことができる環境づくりをめざしていた時、保護者のみならず地域の人々のあたたかい協力や支えがありました。たとえば、設備の整ったプールの建設、コンピュータの導入など早期に実現することができました。当時の生徒達の喜ぶ姿が、鮮やかに思い出されます。

また、生徒達の純朴な姿勢が心に残っています。授業中、教師の声に真剣に耳を傾け熱心に取り組む姿を目にすることができました。私はそんな時間が好きで、よく校内巡視をしたものでした。また、少人数ではありましたが、授業のみならず課外活動、部活動において、大きな成果をあげていました。どんな時でも、素直に前向きにとらえることのできる心は、自然に囲まれたあたたかい人々の中で育まれていたのだと思います。

この立江の土壌で育まれた心は、これからも連綿と受け継がれていくと信じています。それを誇りとして、また心のよりどころとして新しい一歩を進めていってほしいと、切に願っています。